

令和7年度 奈良市立朱雀こども園 研究実践概要

園長名 前田 美穂
全園児数 208 名

1. 研究主題 いろいろな人とのかかわりの中で、自分の思いを出せる子を育てる
～ 安心して過ごす中で、自己発揮できる子どもを目指して ～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

人とのかかわりを通して「人への信頼感」「生きる力の基礎」を育むため、昨年度より異年齢交流や地域とのつながりの中で、自己を受け入れてもらい、自己表現するということが大切にした取り組みを進めてきた。今年度は引き続き取り組みを進めるとともに遊びの場で自然と子ども達がつながり、かかわり合える環境づくりを目指していくこととした。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ＜乳児＞・安心してできる環境の中、身近な人と気持ちを通じ合わせ、一人一人が自分の気持ちを受け止めてもらい、自信をもって行動できるような保育を目指す。
 - ・子ども同士のかかわりが自然と深められるような環境の在り方を探る。
- ＜幼児＞・様々な行事や活動、遊びを通して、人とのかかわりの中で子どもが自分の思いを表現し、自己発揮できるような保育を目指す。
 - ・学年を超えて共有できる遊びや異年齢のカリキュラムづくりを進めていく。

②研究の重点

- ・保育者とのかかわりから得られる安心感を土台に発達の繋がりを重点とし、継続した環境構成や援助等の保育のあり方を探る。
- ・クラスを超えたかかわりが生まれる幅広い取り組みから、子どもの行動や思いについて職員間で語り合い、子ども理解を深め、一人一人の自己発揮に繋げていく。
- ・異年齢児、地域の人とふれあうことの心地よさを感じられるような活動内容を探る。

③活動の方法

＜乳児棟＞

- ・昨年度に引き続き、毎月一回の乳児会議の中で、子ども同士のかかわりが生まれるような遊びの展開について話し合った。今年度は、園庭図を用いることで、可視化し、職員全体で共有するようにした。
- ・子どもの遊んでいる姿や、遊びを通して子どもたちに経験してほしいことなどを、明確に話し合うようにした。

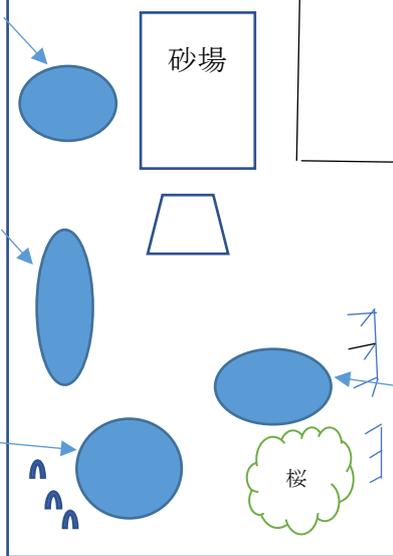
サーキット遊び



転がし遊び



【園庭図】



ボール投げ、玉入れ遊び



○転がし遊び

春から継続して転がし遊びを行ってきた。長いコースで遊ぶ2歳児の様子を1歳児が真似て、ボールを転がす姿が見られた。しかし、距離が長くボールを目で追えない姿があったため、1歳児は短いトイを繋げたものを用意した。年齢に合わせてコースの長さや高さを変えたことで繰り返し転がす姿があり、その中で一緒に遊ぶことができた。また、「(ボールを)かして」「いいよ」などの簡単なやりとりが見られた。夏には水とボール、秋には沢山のどんぐりなどを友達と一緒に転がして音が鳴ることを喜びあう姿が見られた。

○サーキット遊び

年間を通して、しゃがむ、くぐる、渡る、跳ぶ、登るなどの動作を取り入れたサーキット遊びを楽しんでいる。網をくぐる遊びでは、しゃがみながら進む2歳児の姿に0、1歳児が興味をもち、真似ていた。立ったまま歩いて進んだ時には、帽子に網が擦れる感覚を楽しむ様子もあった。異年齢で繰り返し遊ぶ中で、保育者も予想していなかった遊び方を子どもたち自身が発見することもある為、学年を超えて遊びの様子を共有するようにした。

●評価・反省

月一回の会議で、園庭図を用いて可視化を図りながら年齢にあった遊びの内容や職員で連携すべき点を話しあった。職員全体が同じ目的をもち遊びの環境を設定する事や、ねらいを共有するために伝えあうことが難しかったが、実際に遊ぶ中で見えてきた課題や変更点を各学年の職員で話し、その都度改善するようにしていった。遊びの場を固定し、それぞれの遊びの担当を決めたことで、子どもとの関わりも増え、担任以外の保育者に思いを仕草や簡単な言葉で伝えようとする姿が見られるようになった。

<幼児棟>

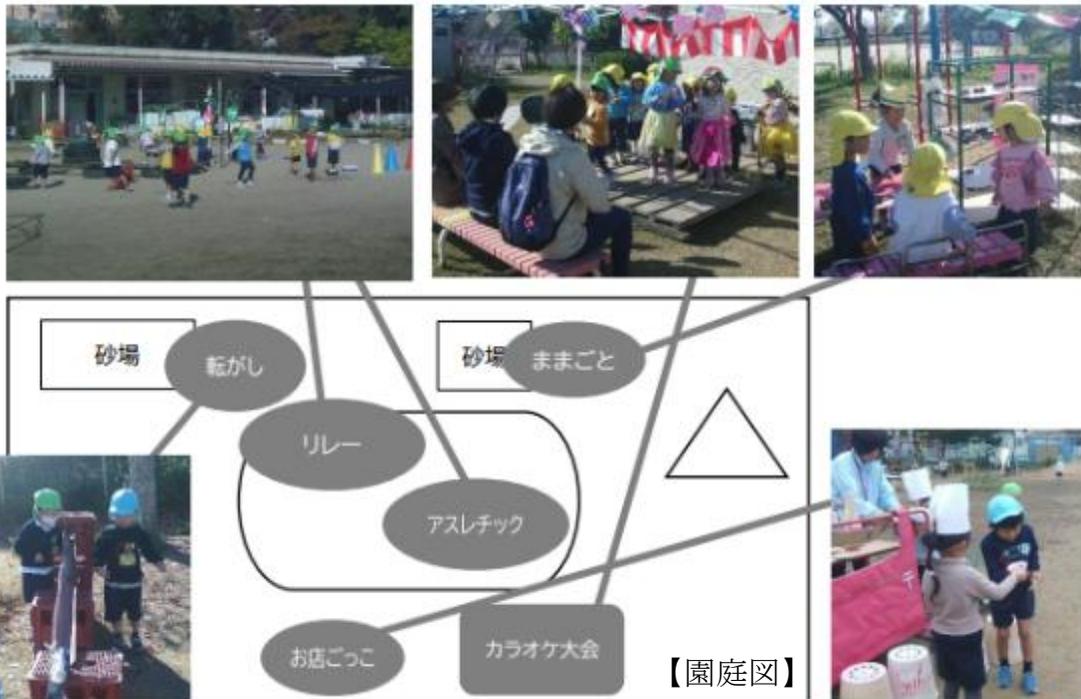
- ・昨年度の異年齢行事カリキュラムをもとに、評価と反省を踏まえながら取り組みを続けた。その中で司会を5歳児が行ったり、新たな行事を設定したりするなどの改善を行った。
- ・遊びについては園庭で遊ぶ子どもの姿から、担任同士で話し合いを重ね、異年齢のかかわりが繋げられるように取り組んだ。

○行事・集会を通して 春～夏

進級・入園当初から、右図のカリキュラムに沿って異年齢でかかわり、互いに親しみをもてるように取り組みを重ねてきた。集会では5歳児が司会をし、いろいろなふれあい遊びや体操を取り入れることで、意欲的に会を進め、思いやりをもって優しくかかわったり、遊びを教えてもらうことを喜んだりする姿が多くみられ、異年齢児が互いの存在を意識する姿に繋がった。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
園内(異年齢)	園内探検	こいのぼり集会	プール開き	七夕集会	夏の遊び大会	お月見集会	運動会(こ)	収穫祭		新年会		お別れ会
園外(地域)	・タケノコ掘り ・サツマイモ植え・奈良高校交流 ・理科実験教室		・平城東中保育体験 ・奈良高校交流・サツマイモ掘り ・平城東中体育祭・理科実験教室		・朱雀小観覧会 ・万年青年クラブ交流		・お話の会(読み聞かせボランティア)・環境ボランティア(環境整備)					
ねらい	○一緒に活動したり遊んだりすることを通して、互いの存在を知り、親しみをもつ。				○触れ合ったりかかわったりすることを通して、優しく接したり、憧れたりする。				○遊びや生活の中で、異年齢の友達に、自分がかかわろうとする。			
保育者の意図	・主に行事を通して互いを知れる、親しみをもてるような活動を取り入れる。 ・触れ合い遊びや体操などで体を動かしながら、かかわって楽しめるようにする。				・互いの活動の様子を見合ったり、誘って一緒に活動したりし、流動的に交流の機会を取り入れていく。 ・3歳児が4・5歳児庭に遊びに来ることを通して、親しみを感じたり、優しい気持ちでかかわったりできるようにする。				・園庭のスペースを年齢や遊びの種類によってゆるやかに使い分けながら、遊び同士がつながり合えるような場の設定を行う。 ・進級を念頭に交流を行う。子ども同士の交流に加え、幼児棟という場に親しみを感じられるようにする。			
	■:学年間の交流			■:幼児全体の行事			□:地域との行事					

○園庭遊びを通して 秋(10月～11月)



○カラオケ大会

ダンスや歌を楽しんでいた4歳児が、園庭にステージをつくってカラオケ遊びを始めた。子ども達と話し合いながら、デッキや衣装、マイクスタンドなどを準備して、歌うだけでなくお客さんにファンサービスをするなどして、友達とかかわりながら遊ぶことを楽しむようになった。すると、垂れ幕や小道具が目立ったのか、次第に3歳児がカラオケ遊びの周りに集まり始め、様子を真似て4歳児の後ろで踊ったり歌ったり、お客さんになったりし始めた。言葉のやり取り自体は多くないが、遊びに来た3歳児のことを4歳児が当たり前のように受け入れたり、4歳児の遊びに興味をもって参加しようとしたりする姿が目立った。

○ドングリころがし

5歳児が木の遊具にトイをはめ込み長いコースをつくり、たくさんのドングリを勢いよく転がしたり、転がしたドングリを鍋でキャッチするゲームをしたりし、遊びを楽しんでいた。その横で4歳児は、トイを使い一つのドングリを転がし、大きな鍋に入ることを楽しんでいた。勢いよく遊ぶ5歳児の姿を4歳児がじっと見入ったり、トイがうまくつながらない時は、「これつかってみる？」と4歳児の様子が目に入った5歳児が洗濯バサミを手渡したりしていた。それぞれ遊び方は違うが、同じ場で環境を準備することで刺激を受けたり自然なかかわりが見られたりする。また、保育者が同じ場でかかわることで、「ドングリがホースから出てきたよ。見て！」と4歳児が5歳児の担任に教えてくれることもあった。

●評価・反省

一学期から計画的に異年齢で交流する集会や行事などを行う中で、各学年同士が親しみをもってかかわったり互いに意識したりする存在になっていった。秋頃になると、保育者に見守られながら自然と異年齢がかかわる姿が見られた。テントや垂れ幕、コースや遊び道具など、視覚的に分かりやすい『モノ』が場にあることで、異年齢がその内容や様子を把握しやすく、遊んでみようとする気持ちになることに繋がり、その中で思いを伝え合ったり相手の思いを汲んだりする姿も生まれた。また、異年齢でかかわって遊ぶ中で、職員が分担してそれぞれの場の様子を見合うことで、他の学年の遊びの様子を知り、子どもの理解に繋がっていった。

異年齢交流のカリキュラムについては、新たに加えたものを含めて次年度に繋げていけるよう、体制づくりを整えてきたことで、年間行事計画に位置付けていくことができた。

5. 研究の成果

乳児棟では遊びの場を固定し担当を決めたことで、いつも同じ保育者がいる安心感があり、したい遊びを繰り返し楽しむ姿が見られた。同じ遊びの場で異年齢が自然と共に遊ぶようになり、刺激を受け合いながらのびのびと楽しむことができた。

幼児棟では、学年で積み上げていった遊びの中に、異年齢が関わり合って楽しむ姿が見られた。計画的に交流を進めていくことで互いに親しみをもち、自然と遊び始める姿が生まれたと考えられる。また、保育者が遊びの中で子どもの姿を見取り、やりたいことを受け止めながら、子どもと一緒に目で見て分かる環境をつくり進めていくことで、子どもたちは、「もっとこうしたい」「こうやったらできるよ」等、身近な人に自分の思いを話し、思いが実現していく喜びを感じ、意欲的に遊ぶ姿に繋がった。

6. 今後の課題

乳児棟、幼児棟でそれぞれが園庭図を活用し、職員間で遊びの共有を行い、環境について考え、実践を積み重ねてきたことで、子どもたちは、年間を通していろいろな人との関わりをもつことができた。分園であることを活かし乳児・幼児の発達に合わせた環境構成と遊びの展開を充実させたい。今後も、関わりの中から生まれる一人一人の姿の見取りを続け、さらに0～5歳児の発達や育ちの繋がりを意識していく必要があると考える。そのために、会議や研修の持ち方、内容などを工夫し、乳児棟と幼児棟の職員が互いの保育・教育について知り、子ども理解を深め、連携に繋げていきたい。